



失われた共存の可能性を求めて

すがせあきこ
菅瀬 晶子
民博 民族社会研究部

90年代の不平等な和平プロセスの破綻を経て、解決の糸口すらみえないパレスチナ・イスラエル紛争。対立ばかりが、両者の歴史ではない。しかし暗澹たる現状の陰で、かつて存在した共存、そしてその後の両者の変化は、いまだ過去に置き忘れられたままになっている。

エルサレムは誰のもの
「エルサレムは我々のもの（アル・クドゥス・ラナー）」

アラビア語でそう大書されたステッカーをはじめて目にしたのは一九九七年初夏、イスラエルとパレスチナ自治政府の和平も行き詰まっていたころである。一九六七年以来、イスラエルの占領下にあるエルサレム旧市街のシンボルのひとつであり、イスラエルにとっては重要な聖地のひとつでもある「岩のドーム」をあしらったこのステッカーは、車のバンパー、商店の店先、ゴミ箱、とにかくあらゆる場所に貼られ、エルサレム所有権はパレスチナにあると訴えていた。

あのスローガンはフェイルーズの歌からとられたのだと、教えてくれたのはパレスチナ人の友人だった。フェイルーズは隣国レバノン出身のキリスト教徒で、今や伝説の域に達した、アラブ世界屈指の歌姫である。パレスチナ人の故郷への想いを代弁した代表曲のひとつ、「アッ・ザフラトゥ・ル・マダーイン（あらゆる街のなかの花の意）」のラスト近くでは、「この家は我々のもの、エルサレムは我々のもの」という一節が、確かに聞きとれる。

「あれはいい曲よね、とっても」
友人はそういって、ステッカーについての評を締めくくった。あえてフェイルーズ

の曲のみを賛美したのは、彼女がステッカーに不満をおぼえていたせいだろう。フェイルーズ同様、キリスト教徒である彼女にとって、エルサレムの象徴は岩のドームではなく、イエスが復活を遂げた「聖墳墓教会」にほかならない。パレスチナ人口の二割を占めるキリスト教徒のため、このステッカーには聖墳墓教会も描かれるべきだという主張を、わたしはのちにほかのキリスト教徒の友人たちから聞くことになる。

そしてわたしもまた、似たような危惧を、このステッカーに対して抱いていた。このステッカーの「我々」はいうまでもなくパ

レスチナ人、しかもおそらくムスリムのみである。ステッカーに聖墳墓教会はもちろん、ユダヤの聖地「嘆きの壁」も加え、イスラエルが建国される前に、エルサレムをこの地に生きるすべての一神教徒で共有しようという者はいないのか。以来このステッカーを目にするたびに、ナシヨナリズムの厳然たる排他性を突きつけられ、暗然とってしまうのだ。

ふたつのナシヨナリズムの接点をさぐる

それまで漠然とパレスチナとよばれ、アラブ人たちが暮らしていた東地中海沿岸西部に、シオニズムを掲げるヨーロッパ・

ユダヤ人が入植をはじめたのは、一九世紀末のことである。その後、第一次世界大戦後の英国による委任統治時代を経て、彼らは一九四八年にユダヤ国家イスラエルを建国することになるが、その結果一〇〇万以上ともいわれるアラブ人（パレスチナ人）が家や土地を失い、難民化することとなった。これをパレスチナ人たちは、「ナクバ（大災厄の意）」とよぶ。

一般的には、この四八年のナクバが、パレスチナ・イスラエル紛争の発端とされている。しかしながら、当時すでにユダヤ人の入植がはじまって半世紀が経過していた。紛争は突如降ってわいたのではなく、半世紀のあいだに入植者とアラブ人との接触があり、摩擦へと発展していったというのが真相だ。一九二〇年代に入ると、アラブ人たちは入植に危機感を抱くようになり、周辺地域で起こっていたアラブ・ナシヨナリズムの影響を受けて、パレスチナ人アイデンティティを醸成しはじめる。つまり彼らは、ユダヤ人入植者の存在を認識することによって、パレスチナ人となったのだ。

もっとも、入植者とパレスチナ人のアラブ人との接触が、不幸なものばかりであったとは、必ずしもいえない。一部の地域では、両者が四〇年代まで平和に共存していたという証言も残っている。さまざまな宗教・教派が雑多に入り混じるパレスチナでは、



イスラエル側からヨルダン川西岸地区を隔てる「分離壁」。イスラエル側は「安全保障フェンス」、パレスチナ側や人権活動団体は「アパルトヘイトウォール」とよぶ

古来異なるバックグラウンドをもつ者たちが隣人として助け合い、宗教行事を共有するのは当然のことであった。つまり、聖地エルサレムの一方的な所有権を訴えるようなステッカーが生まれる下地は、本来存在しなかったのだ。

シオニズムもパレスチナ・ナシヨナリズムも、当初は自分たちの国がほしいという、まっとうな希求から生まれたものである。しかしながら、アラブ人との接触や外部からの影響を経て、シオニズムは排他的な性格を帯びるようになり、その姿勢は今日の占領政策の根幹をなす。それに自爆という「殉教行為」で対抗しようとする一部のパレスチナ解放運動もまた、シオニズムの合わせ鏡のような存在といえよう。共同研究「パレスチナ・ナシヨナリズムとシオニズムの交差点」は、これまでほとんど研究されてこなかったこれらふたつのナシヨナリズムの接点を、さまざまな視点から探ることをめざしている。9・11から一〇年を経て、さらに硬化しつつあるこの紛争のゆくえを見定めるためにも、必要な作業であらう。

共同研究
「パレスチナ・ナシヨナリズムとシオニズムの交差点」
2011年10月〜2014年3月
代表者：菅瀬 晶子



エルサレム旧市街の「岩のドーム」。ムハンマドがここから昇天したといわれる、ムスリムにとって重要な聖地